

名作の舞台から

矢切の渡し

日本交通技術株式会社 設計第一部 第三設計課 富永新一



■写真1ー「矢切の渡し」(矢切側)

後の月という時分が来ると、どうも思わずには居られない。幼い訣とは思うが何分にも忘れることが出来ない。もはや十年余も過去った昔のことであるから、細かい事実は多くは覚えて居ないけれど、心持だけは今なお昨日の如く、その時の事を考えていると、全く当時の心持に立ち返って、涙が留めどなく湧くのである…

伊藤左千夫の処女作である小説「野菊の墓」は、松戸から二里ばかり下った矢切の渡しの東側にある小高い岡の上の矢切村を舞台に、旧家で育つ政夫とその従姉民子の、淡くて切ない悲恋物語である。政夫が15歳の時、病弱の母の世話をするため、従姉で2つ年上の17歳の民子が家に住むようになる。以来二人の仲は親密になったが、二人を中傷する周りの声が強まり、政夫は予定より早めて中学の寮に入れられ、一方正月には帰るといふ政夫を待つ民子には縁談が持ち込まれる。拒む民子をよそに、大人たちは一方的に話をすすめる民子は嫁に行くが、それから数ヶ月後は帰らぬ人となる。

政夫が中学の寮に入れられる日、民子との生涯の別れとなってしまふ場面が『矢切の渡し』である。この『矢切の渡し』は、松戸市下矢切と東京都柴又を往復する渡しで、その始まりは380余年前江戸時代初期にさかのぼる。当時、江戸への出入は非常に強い規則のもとにあったが、江戸川の両岸に田畑をもつ農民は、その耕作のため関所の渡しを通らず農民特権として自由に渡り船で行きかうことができた。これが『矢切の渡し』の始まりで、いわゆる農民漁船と言われるものである。明治以降は地元民の足として利用されていたが現在ではほとんどが観光客の利用のみとなり、江戸川にあったとされる40の渡しのうち唯一の渡しとなっている。



■写真2ー打ち立てられた木杭に書かれた「矢切の渡し」が渡し場の目印



■写真3ー舟を待つ人々 渡し場は全て木製で、周りを木々が覆っている



■写真4ー渡し場近くの遊歩道に建てられている「日本の音風景百選」の碑

管轄は国土交通省だが、現在の矢切の渡しを支えているのは船頭の杉浦正雄氏とその息子さん。4代にも渡って続けており、渡し場の補修からその費用まで全て負担している。運賃は片道100円で、その料金は25年間変わっていない。手から手へ、運賃は直接先頭さんに渡す。混んでいなければ自転車も乗せて運んでくれる。12月から2月までは土・日・祝日のみの運行となるが、他は天候が許す限り毎日、およそ150mの江戸川を往復している。ギーツ、ギーツと舟を漕ぐ櫓の音、四季を感じる多くの野鳥たちの声、対岸の柴又側を含めた「柴又帝釈天界隈と矢切の渡し」は「残したい日本の音風景100選」に選ばれている。矢切の渡し場からは「野菊のこみち」が西蓮寺まで続いており、道中には所々に小説の情景を想わせる道標が建てられている。西蓮寺には小説の一節を刻んだ文学碑があり、隣接している野菊苑展望台からは矢切耕地、江戸川の流れ、遠方には東京の街並みが見渡せる。



■写真5ー渡し場(矢切側)から西蓮寺まで続く「野菊のこみち」



■写真6ー小説「野菊の墓」の情景を描いた道標。「矢切の渡し」に手を振っている

左千夫の兄の孫にあたる春木千枝子氏が次のように述べている。「左千夫は度々柴又の帝釈天を訪れ、江戸川を渡って松戸から市川へ出て帰ったが、矢切辺りの景色を大層気に入り、こんな所を舞台に小説を書いたら面白いだろうなどともらしていた。」

ヒットした同名の歌謡曲「矢切の渡し」、対岸側の柴又を舞台としている映画「寅さん」にもこの『矢切の渡し』は出てきている。分野を問わず、さまざまな芸術作品に取り上げられるということは、それだけ人々の心に訴えかけるそれぞれの情景があるに違いない。時には寄り道をする気分で喧騒を離れ、ほんのわずかな時間、川の流れに身をまかせて木舟に揺られてみるのもいいかもしれない。

(参考文献)
 「日本文学全集別巻1 現代名作集」河出書房
 「歌人伊藤左千夫」春木千枝子(新樹社)
 松戸市ホームページ
http://www.city.matsudo.chiba.jp/cgi-bin/odb-get.exe?WIT_template=AM040000
 松戸市観光協会ホームページ
<http://www.intership.ne.jp/m.kankou/page/frame.htm>



■写真7ー西蓮寺に建てられている小説「野菊の墓」文学碑